

第三章 意識のハード・プロブレム

現代の科学は伝統的な東洋の心理学とは異なり、物質を基準にした唯物論的な立場から心を探究する。私たちの意識経験を、自然世界における一切の現象と同じように、物質存在あるいは物質のはたらきによって説明付けようとする。現代科学の理論の内には、東洋の心理学のような形而上学的な要素が加わる余地は全く無いと言ってよい。実際に現代の脳科学の無数のデータは、心の活動が神経細胞群の活動に密接に相関していることを明瞭に示しており、これら一連のデータは、心は自然世界の一部であって、他の物理現象と同じように心に関しての物質を基準とする合理的な論理体系を構築することが十分に可能であることを期待させるものである。

しかしながら、意識経験に限って言えば、私たちが考えているようなかたちでの物質を基準にしては、どうしても解決することのできない本質的な問題が最後には残ってしまう。

現代の神経生物学が指摘するように、確かに、心の活動は神経ネットワークの活動に密接に関係している。心ははたらいているときには、それに相関してはたらく神経細胞群が存在している。心の活動と神経の活動はまるで無関係というわけではなく、むしろ、両者の活動は密接な相関関係を示している。

しかしながら、神経細胞そのものや、神経細胞の発火は、心そのものではない。他人の頭の中に観察できる神経発火と私たちが今知っている意識経験は明らかに異なる事象である。モノや物理現象は客観的事象であるのに対して、心は主観的事象である。私たちが規定するところのモノと心は、存在論的には明らかに異なるカテゴリーに属しているように思える。

哲学者のジョン・サールの言葉を借りれば、心はモノに機能的には還元可能であるが、存在論的には還元不可能である[※]。心のはたらき（機能）はモノのはたらきに置き換えて説明することが可能であっても、心という存在概念（主観的事象）とモノという存在概念（客観的事象）は明らかに異なっており、前者を後者へと存在論的に還元することは不可能である。

※ ジョン・サールは、意識は神経プロセスに因果的には還元可能であるが、存在論的には還元不可能であると指摘している。意識の因果的な力は神経プロセスの因果的な力へと還元可能である。しかしながら、意識は一人称的・主観的な存在論的性質を備えているのに対して神経プロセスは三人称的・客観的な存在であり、（意識の一人称的な性質を失うことなく）前者を後者へと存在論的に還元することはできない。（ジョン・R・サール「心の哲学」山本貴光・吉川浩満（訳）朝日出版社 2006）

今日の神経科学が指摘するように、心の活動は神経ネットワークの活動に相関する。赤の経験が生じるときには、それに相関する神経活動がある。チェロの音が心に響くとき、それに相関する神経活動がある。自我を仮構する五蘊（色受想行識）が機能するときには、それに相関する神経活動が存在する。多彩な心のはたらきや活動は、複雑な神経ネットワークのはたらきや活動として説明することができる。つまり、心はモノに機械的には還元することが可能である。

しかしながら、心そのものは（現在、私たちが定義するところの）モノや物理現象ではない。赤の色やチェロの音のような主観的経験は、神経細胞や神経発火そのものではない。自己を仮構する五蘊（色受想行識）の主観的経験は、神経細胞や神経発火そのものではない。主観的な知るといってはたらきが生じるところの意識の場は、神経細胞や神経発火そのものではない。

「主観的な存在である心」と「客観的な存在であるモノ」は、明らかに異質な存在となっている。私たちが定義するモノと心は存在論的には明らかに異なる概念となってしまう。私たちが定義するモノの存在カテゴリーに、主観的な存在である心は属していない。つまり、心をモノに存在論的に還元することは不可能である。

もし私たちが意識経験を説明しようとして、万物の基準としてモノを採用した場合には、「如何にして、客観的な存在である〈モノ〉から主観的な存在である〈心〉が生じるのか」という解決すべき難問（ハード・プロブレム）が必然的に浮上してくる。客観的な存在であるモノから主観的な存在である心が生成するための基本原理を、私たちは考案せねばならなくなる。現代科学が規定する量子レベルから生物レベルまでの物質のはたらきを総動員して、モノから心を生成するための原理を考えねばならなくなる。また、非常に複雑な神経回路を組み立てて、モノから心を生成するための仕組みを考えねばならなくなる。しかしながら実際のところ、客観的事象から主観的事象を生み出すための基本原理というものは、いくら考えても全く分からない。それはどう考えても分からないために、心の哲学の分野では、ハード・プロブレム（難しい問題）と呼ばれている[※]。普通、まともな科学者はそのような問題を無視しているか避けているのが常である。あるいは、もっともらしい言葉で別の問題にすり替えている。

※ 意識の「ハード・プロブレム（難しい問題）」と「イージー・プロブレム（やさしい問題）」は、オーストラリアの哲学者デイヴィッド・J・チャーマーズ（1966～）によって提唱された概念である。脳（モノ）という物質存在から主観的な意識経験が生まれる基本原理を問うのが「ハード・プロブレム」であり、意識経験に関わる脳（モノ）の情報処理の仕組みを問うのが「イージー・プロブレム」である。この定義に従えば、現代の意識研究が扱う問題のほとんどすべては「イージー・プロブレム」である。

もし私たちが、その問題のあまりの難しさのために、客観的事象（モノ）から主観的事象（心）を生成させるための基本原理を考案することをあきらめて、心は身体に宿る魂であるとみなし、魂とモノ（身体）は異なる二つの実体として相互作用（相互連絡）するという二元論的なアイデアを採用したとしても、根本的には問題の解決には至らない。今度は、存在論的に二分された心とモノ（身体）が、どうやったら協調してはたらくことが可能になるのかという新たな論理的難問が浮上することになる。存在論的に二分された両者のあいだでの情報伝達の仕組みを考えねばならなくなる。心とモノのあいだを橋渡しする「精神物理法則」を考案せねばならなくなる。しかしながら、現状では、やはりそれも絶望的に難しい問題（ハード・プロブレム）と化してしまっている。そのような二元論バージョンのハード・プロブレムが解決される見込みは、今のところまるでなさそうである。

このようにモノを基準にして意識経験を説明付けようとしても、現状ではモノと心は存在論的には明瞭に分離されているので、結局は上手くいかない。二つの事象を機能的には上手く結び付けることはできても、存在論的には結び付けることができない。今のところ両者は、手の施しようがないほどに完全に分離した存在概念になってしまっている。モノを基準とする心の理論の中には、最終的にはハード・プロブレムと呼ばれる論理的難問が未解決のまま残されることになる。

実際のところ、形而上学へと通ずる東洋の心理学や思想を批判し、唯物論的にモノを基準にして何らかの意識モデルや世界モデルを考えてみたとしても、今のところ論理的に満足のいく理論は生まれてはこないのである。現代の科学は、心のはたらきとモノのはたらきの密接な相関関係を浮き彫りにしてはくれるが、両者の存在論的な断絶を取り繕うことはできない。

次の第四部では、このような現状を解決するために、「モノ」と「心」を再定義し、両者を存在論的にも機能論的にも一つに結び付ける道を模索してみる。人間の知性の営みが定義して峻別したモノと心を、再び一つに統合する道を探ってみる。ポイントとなるのは、私たちが規定する物質存在の概念を根底から見直すことである。人間の理性のはたらきが規定したモノに対する従来の考え方が見直されない限りは、モノと心を本来一つのものとして扱うことはできない。心の本質を探ることは、モノの本質を探ることに通じている。